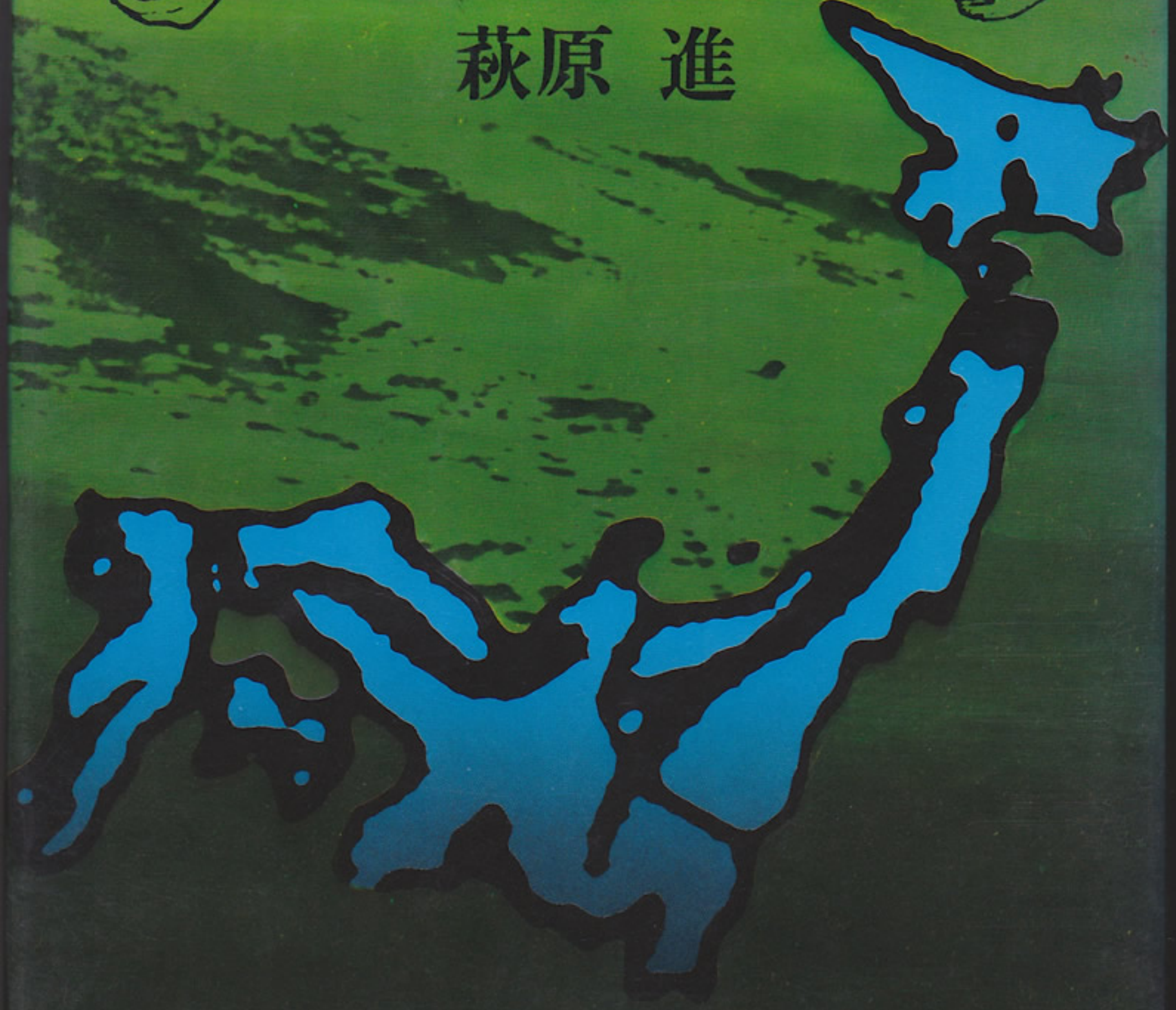
日本人国記

群馬県人

萩原 進



新人物往来社

新田勤王党

結党の背景

幕末の混乱期に倒幕派に属して活動した県人は多く孤立した単独行動の個人が主体であった。ただ、新田勤王党だけは集団として反体制運動をした。その背景に、新田郡には太田宿をはじめ大きな藩がなく、ほとんど天領か旗本領であったことが挙げられる。幕府直轄領は倒幕派を鎮圧するだけでも大変で、地方の取締りにまで手配が及ばなかったことが一つある。いま一つは、南北朝時代に北条鎌倉幕府を討ち、天皇政治の復古を成し遂げた功労者として新田義貞一族を出した土地であり、高山彦九郎を出したところという自負があった。しかも新田氏は、足利尊氏のために、一族は散り散りになるという悲劇の歴史に沈潜させられていた。義貞時代の一族の主な者は郷国に戻ることはなかったが、その支族、姻戚は新田郡一帯に生き延びていた。尊王、倒幕の渦巻く中で、反幕的行動に走る大義名分というものを持っていた。その上に群馬県人の持つ反骨性、激情性もあって、新田勤王党は結成されたのである。皮肉なことに、新田郡は徳川家康が自分の先祖発祥地として保護を加えていたところである。その特別保護区から県内で最も過激な倒幕の集団が現出したのであるから皮肉である。

大義名分を掲げる以上、結党の象徴となる人物如何が問題となる。新田郡下田島（現太田市）に新田氏の後裔として徳川家綱から新しく百石をもって召抱えられたのが岩松義純（後秀純）である。寛文三年（一六六三）のことであった。岩松氏は『新田岩松古系図』によると、新田義重の子義兼の後家が新田岩松を称したというのが有力である。『正木文書』には、建保三年（一二

一五）義兼の後家（新田尼）を岩松、下今居、田中の三郷の地頭職に補したことを伝えているし、また貞応三年（一二二四）には、新田尼の孫、時兼に岩松郷などを譲渡した文書がある。

ゆつりわたす上野国新田御庄内やしき岩松郷幷春原庄内万吉郷間事
源時兼
右件りやうかうゆつりわたす事しち也。たゝし子々孫々にいたるまてまたくたのさまたけあるへからす。仍ゆつりわたす事こと如件
貞応三年正月廿九日　にたのあま（花押）

こうした関係から、岩松氏は義兼の後家とする説があるが、義重の弟で足利氏の祖となった義康の子義兼、その子足利義純の時兼が岩松の祖であるとする『尊卑文脈』の記載があるし、『長楽寺系図』には、新田義兼の娘が新田岩松を号して足利義純の妻となったが、義純の子時兼その子経兼が岩松を号し、子孫が江戸時代の岩松氏につながるとしている。元男爵新田家の『新田岩松系図』では、新田義重の子義兼の女が足利義純の妻となり、その時兼の三男遠江五郎経兼が岩松を姓とし、六代目家純のとき新田の姓に復し、明純――尚純――昌純となったと伝えていて諸書一定しない。一般に義宗の子満純から出たとされているがこれも決定的ではない。

また別の所伝によると、義純は実は畠山重忠の子で足利義兼の養子と不和となったので上野国新田の庄岩松へ移り、岩松氏を称したという。これらを大別すると、新田氏系と足利系の二つになるが、正木文書などからみて、新田系と見るべきではないだろうか。ただ、「義兼」という名

が、新田氏にも足利氏にもあるため、錯雑しているのではないだろうか。足利系では南北朝時代に岩松満国が義貞の子義宗の二男を養子にし、新田氏と結びつけている。『新田横瀬由良系図』では、義宗の子貞氏が延元年中金山城の初代城主となり、横瀬氏を名乗り、江戸時代初めに唯一の新田氏の後裔とされ、「高家」に取立てられた横瀬の祖としている。しかも、この系図は横瀬成繁のとき、「家臣」岩松尚純と岩松昌純が逆意を企てたのでこれを滅ぼしたとある。一般には、岩松が主家で金山城主であった岩松満国の孫家純（源慶院殿）――明純――尚純（礼部、法名静喜）――昌純のうち、最後の二人を家臣の横瀬が滅ぼした下剋上の好例とされている。岩松尚純が横瀬の主であることはまず間違いあるまい。しかも金山城主であったことは、連歌の師宗祇の『萱草』の中に、

新田礼部亭にておなじ心を

雨とのみ散りしもしるきくち葉かな

とあるし、宗祇の高弟宗長の『東路のつと』に、永正六年（一五〇九）八月十七日新田（岩松）尚純を訪れて連歌の座を開いたことを伝えている。

明る朝（八月十七日）利根川の舟渡りして、上野の国新田の庄に、礼部尚純隠遁ありて、今は静喜、かの閑居に五六日、連歌度々におよべり。

と記しているように、横瀬の家臣を訪問するはずはなく、岩松が主君であったことはたしかである。『松陰私語』では、明らかに源慶（岩松家純）の御代はその威勢が先代（岩松満国の子満純）に過ぎぬ。先々代（岩松満国）は「岩松流遠江流両流也」と岩松は新田系と認めていることが何よりも有力となる。家純は九歳のとき長楽寺にいたが、甲州にゆき武田方を頼みにしたが、思わしくなく、美濃の土岐氏に隠れた。しかし、足利成氏のとき、新田家再興のことで懇願した。家純が松陰に新田家再興のことは将軍足利義教の恩であることを自分に話してきかせた（『松陰私語』）

岩松氏の江戸時代の館「岩松館」

ということからも、岩松が新田の唯一の後裔であったといえそうである。横瀬のために岩松は金山城を逐われ、昌純の弟氏純は長楽寺に入ったが還俗して岩松家を継いだ。氏純の子守純は新田満次郎と称し、浪人して徳川家康に面会を乞い、家系図を見せて拾われ、二十石を与えられて世良田に住んだが、守純の孫義純（後秀純）は四代将軍家綱に召出され、新地百二十石を与えられ、新田郡田島郷（現在太田市下田島）に邸を構えて住んだ。その後秀純――富純――慶純――孝純と経て幕末にいたり、岩松俊純の代を迎えていた。代々万次郎を称した。

新田俊純の擁立

新田俊純は下田島にあって「新田の殿様」とよばれて百二十石ではあったが、その格式だけは高いとされていた。しかし、生活が苦しく、糊口を

しのぐために頼まれれば得意の猫の画を書いてその代金で生活したといわれる。県内に俊純の描いた画をしばしばみるが、養蚕のとき繭をネズミから守る御利益ありとされていた。智丸、兵部、主税、万次郎と称した。先にも述べた大館村（現在尾島町）の大館謙三郎は新田氏一族大館宗氏の血統として知られた家に生まれたが、尊王、佐幕の対立する中で、倒幕派に心を寄せ、境町の村上俊平や新田郡の黒田桃民らと浪士組に応募したが、志と事実が合わず帰郷した。一説には、文久年間に、例幣使街道の太田宿本陣に、薩摩藩の鮫島雲城が一年半ほど滞在して新田満次郎を押立てて義軍を結成する画策をしたといわれる。この雲城は変名で、中井弘三（弘・桜洲）であった。中井は幕末に倒幕運動に奔走し、明治になり京都府知事となった人物である。このとき、ともに義軍結成につとめたのが桑原梧楼（本名金井五郎、後の之恭）であった。大館、金井と、本陣の橋本多賀之助らは新田郡は南朝のとき孤忠を尽し、一族悉く滅ぼされた勤王の伝統を持つ誇りを説き、今こそ皇室のために徳川幕府を倒すために蹶起しようと呼びかけた。慶応三年、時機到来し、新田満次郎（俊純）を盟主とする新田勤王党の組織ができ、尊王討幕の謀議をしていたが、決行前にその謀が洩れ、幕府方のために逮捕されてしまった。一行は武蔵国本庄の獄に繋がれて、そこで四十日余を過ごし、さらに本庄から熊谷と岩鼻の獄に移され、金井之恭、大館謙三郎、黒田桃民、本島自柳の四人はそれぞれ処刑されることにきまった。幸いにも慶応四年春、東山道総督岩倉具定の一行が中山道を江戸に向って進軍してきたことにより、九死に一生を得て刑死をまぬかれ、自由の身となった。こうして、新田勤王党はこれという行動の成果はあげられずに終ったが、慶応四年の戊辰戦争において、「新田官軍」という一隊を編成し、勤王党結成の力をさらに強化し、奥羽連盟軍と官軍が衝突した上州利根郡方面の戦いに出陣し、輝やかしい戦果

をあげることができた。徳川幕府が倒れる最後の日において、幕府に一矢を報いることができたのである。

新田官軍

新田勤王党は結成の段階で終ったが、首謀者の四人は、慶応四年二月、新田満次郎を盟主として新田官軍と名を改め、官軍の隊列に加えてもらいたいという願書を、進軍中の東山道総督岩倉具定の本陣に差出した。その嘆願書には「私共は左中将新田義貞旧封の地の草莽鄙野の岩穴に潜居している者であるが、嘉永六年以来外夷の侵入を傍観し兼ね痛憤切歯し、同志の者、尊攘の大義を弁えて日夜会議をして憂慮してきた。何とぞ外夷を攘い、宸襟を安んじ奉りたいという願望であったが兎角奸吏の妨げにあい、空しく日時を費してしまった。この度、王政復古の布告を承り、雲霧が晴れた心地がし、この上は一日も早く上京したいと存じながら卑賤の私共には心に任せずあったところ、東山道鎮撫の軍が下向するときき、雀躍して喜んだ。新田義貞の遠孫俊純も同志で、別に俊純からも願出すと思うが、私共総代として御本陣まで参着したものである。何とぞ小臣らの微衷御憐察下され、特別の思召を以て御採用下され、鎮撫の御用を仰付け下し置かれたい。御採用になれば粉骨忠勤いたすつもりである」といった趣旨が記された。願人は桑原五郎（金井之恭）、大館謙三郎、谷川愿三、細野伝左衛門、宮崎修吉、篠塚勝次、岡田昌道（代理佐々木英之助）、石川熊武、橋本多賀之助（正誠）の九名となっている。この願書に新田官軍の性格がよく示されている。民間人が軍を組織して官軍の隊列に加わりたいという民兵の組織的参加であって、その意気たるやまことに壮烈である。

一方、新田満次郎個人の名で、慶応四年三月東山道鎮撫総督の一行が高崎まで進軍してきたとき本陣へ提出した。その文面は、建武中興において衰運にあい、勤王の志を貫徹できなかった左

中将義貞の一族として家系にのこったわずか一筋の子孫である俊純は、元より微賤の小臣であるが、常に祖先勤王の遺志を変えず、今日まで旧領に在り、一族の旧臣共を集め、皇家の藩屏となり、あわせて祖先の悲願を回復したい志願であったところ、今般たとえ寸功であれ立てて義貞勤王の微衷を貫徹したいと思っている。進退は指揮に一任したいので、私の心を御洞察下されれば千謝万感の至りである、と記している。

こうした志願に対して東山道鎮撫総督は、慶応四年三月十一日付で、

其方儀祖先左中将之遺志を継ぎ、為国家忠勤仕度趣再三及歎願に付、中軍随従申附候条、無用之冗兵を除き、精撰之士を率ひ勉励尽力可致候事

慶応四年三月十二日　　新田満次郎

東山道鎮撫総督
同　副総督

という指令に接した。新田俊純はこの指令を受けて、桑原五郎らと協議し、新田郡中の有志に対し、執事の名で、今般勅を蒙り官軍に随従するよう総督府より仰渡されたので、急速出陣するから、祖先左中将義貞旧封の地に居住している一族旧臣共へすべて通達すべきであるが、本陣へ遅参しては申訳ないから、取りあえず出陣したいので、有志の者は誘い合わせ、旅宿まで参集するよう主人の命令であるから申入れると通知した。こうして、四月一日に、太田の大光院を陣営所と定めて発足した。新田郡に一種の農兵隊が結成されたわけである。現在遺っている記録による

と、新田官軍の編成は本隊が四十五名、江戸御本営御玄関番十三名の計五十八名である。本隊の方は、輜重、馬懸、玉薬方、炮隊にわかれている。全部新田郡の住民たちであった。この結成前に、新田郡方面でも無警察状態に乗じ、打ちこわしの暴動が各地に発生したが、新田官軍の力で忽ち鎮圧し、兼ねて軍事訓練にも役立てたのは注目される。

その後の新田官軍の行動を見ると、先ず武州忍城へ官軍進撃のとき、洋砲三十挺余と火薬を渡され、兵糧も支給されて行動を共にした。さらに総督の旗を守る命令に接したので、その守護を受持った。実戦に参加したのは、慶応四年四月二十八日出陣の命令を受けて、奥羽連盟の会津軍が上州利根郡の尾瀬ヵ原を越えて関東表へ出陣してきた一隊との戦い（戊辰戦争）の時である。五月三日沼田に到着した。既に官軍方に帰順した上野国諸藩である前橋、高崎、館林、吉井などの藩兵とともに片品川に沿って進軍した。そのときの新田官軍の一人高木潜一郎の手記によると、五月十一日土出村に到着し、本陣のあった大円寺を出発し、三平峠を越えて尾瀬ケ原に出た。そこで会津兵の待伏せに会い、高木も銃をもって応戦したが、敵情を見て一たん大円寺に戻ったが、間もなく、四百人ばかりが襲撃してきた。激戦となったが、烏合の衆の藩兵は実に弱く、新田官軍の方が勇敢であったことを伝えている。戊辰戦争のあと、新田官軍は東京の鎮将府に編入され、市中の警備に当った。その頃は立派な軍隊に成長し、隊長、副隊長、司令士、玉薬改、嚮導役、御馬懸、兵士頭取といった五一名の編成であった。ささやかな抵抗であったが、群馬県人の反骨を物語る幕府への一矢は報いることができた。このときの指導的役割を果した金井、大館、黒田などについてその略歴を記しておくことにする。

金井之恭

天保四年、勤王画家金井烏洲の三男として佐波郡島村に生まれた。通称文八郎、五郎（梧楼）といった。元治元年、水戸浪士天狗党の上州通過のとき会見して、その行動を支援した。出流山の変のときもこれを援助した。新田満次郎俊純を立てて新田勤王党を結成したが未然に発覚し、死罪にされるところを東山道総督に救われたあと、新田官軍を編成して官軍方に加わったが、明治新政府となるや市政局に出仕し、明治七年権少史に進み、明治二十一年には元老院議官錦鶏間祗候、二十四年貴族院議員に勅選されたが、明治四十年七十五歳で没した。書道を得意とし、巖谷一六、日下部鳴鶴とともに明治の三筆といわれた。

大館謙三郎

新田郡上田中村（現在新田町）に文政七年に生まれた。少年時代江戸に出て昌平黌に学び、古賀侗庵に師事した。西遊して多くの志士と交った。幕末勤王佐幕の時代に、清川八郎のもとに同郷の村上俊平と加わったが、事志とちがい、難を水戸に避け、水戸の武田耕雲斎、藤田小四郎らと交った。慶応三年に金井五郎とともに新田勤王党を結成したが逮捕投獄された。そのあと新田官軍を組織して大隊長として活躍したことは既述の通りであるが、維新後一時岩鼻県に出仕したが間もなく退任し、郷里で広業学校を創立するなど地方振興に尽した。明治八年五十二歳で没したが、大館家はその祖先が新田氏の一族であっただけに、新田官軍においても重鎮の一人であった。贈正五位。

黒田挑民

天保九年新田郡村田村（現新田町）に生まれた。幼名道之助、通称信一郎という。父の医業を継いでいたが、若い時から尊王の志をもっており、二十歳のとき清川八郎らの浪士組に入ったが、慶応三年に新田勤王党の組織の中核となった。維新後郷里で医業に従事し、地方の開発に貢献した。

本島自柳

天保十一年太田宿の医師の子として生まれた。少年時代江戸に出て幕府の教官長谷部謙庵、梁川星巌らに師事し、さらに長崎熊本に遊学して帰郷した。純情熱血の性格であった。新田勤王党に加わり、同志とともに風前の灯の命を助かるや、新田官軍に加わり、戊辰戦争では、一方の隊長となり金井某とともに戸倉口に戦い帰郷した。明治に入るとともに一切の任官をことわり、郷里で医業に従事し、県会議員にも当選して地方自治にも尽力した。大正十三年八十五歳で没したが、反骨に生きた一人である。

〔参考著書〕

『上州―風土と人―』（創元書房）
『上州人』上・下（上毛新聞社）
『上州おんな風土記』（いずみ書房）
『群馬県女性史話』（西毛新聞社）
『群馬県遊民史』（上毛新聞社）
『群馬県青年史』（群馬県神道青年会）
『資料・上州人』（みやま文庫）
『上州路旅日記集』（みやま文庫）
『群馬の苗字』正・続（朝日新聞前橋支局）
『騒動――群馬県農民運動史ノート』（高城書店）